

横須賀の足袋：
人びとの心に根付く白足袋と神事における黒足袋

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 理沙 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9959

横須賀の足袋

～人びとの心に根付く白足袋と神事における黒足袋～

岡田理沙

- 1 はじめに
- 2 横須賀足袋
 - 2.1 横須賀足袋とは
 - 2.2 祭り装束の中の横須賀足袋
 - 2.3 代わりのない横須賀足袋
- 3 西大渕黒足袋
 - 3.1 西大渕とは
 - 3.2 お祓いの際の黒足袋
- 4 おわりに
 - 4.1 粋の横須賀足袋
 - 4.2 象徴の黒足袋

1 はじめに

フィールドワーク実習先が大須賀地区に決まってから、観光協会のホームページでどのような地域であるのかを調べてみた。そこで足袋の店「わたや」についての紹介ページを見つけた。そこには足袋の店「わたや」は「遠州横須賀祭り足袋」という横須賀ならではの特殊な形をした足袋を販売しているとあり、そこから足袋について興味を持った。

遠州横須賀祭り足袋は三熊野神社大祭で祢里（ねり）を曳くときに使用される。実際にどのように履かれているのかを見るため 2016（平成 28）年 4 月 3 日に祭りの最終日を訪れた。13 の字町それぞれに祢里や祭り装束が少しずつ異なる中で、字町関係なく、祭りに参加する人は皆一様に同じ足袋を履き、それが唯一の共通点のように見えた（写真 1）。そこから、横須賀の人びとにとって「遠州横須賀祭り足袋」は当たり前のものであるがその重要性に気づいていないのではないかと。三熊野神社大祭の伝統だけでなく、この足袋が祢里を曳く人びとを支え続けているのではないかと、という仮説を立てた。本報告書では以上の仮説のもと、実習を踏まえて見えてきた「遠州横須賀祭り足袋」に込められた横須賀の人びとの思いと、予想していなかった黒足袋の存在について述べて考察する。

近代においても続けられている儀礼であるが、その正確な意味を知るものがほとんどいない例として、イギリス女王の戴冠式がある。青木保は『儀礼の象徴性』の中で、戴冠式

中に女王が身につける衣の変化が普通の一人の女性から民を守る偉大な女王に変わることを象徴しており、かつ戴冠式そのものが女王は国民を守るべき存在であることを象徴するものであると述べている。また、戴冠式という儀礼は国家の一大イベントとして続けられ、国民はそれに対し熱狂するのであるという（青木 2006）。このような黒足袋のもつ象徴性とそれが履き手にもたらす変化は、横須賀という小さな地域でも同じことがいえる。この視点からも二つの足袋を比較していこうと思う。



写真 1 祭り参加者の足元（岡田撮影）

2 横須賀足袋

本節では、本章のメインテーマである「横須賀足袋」について整理する。

2.1 横須賀足袋とは

横須賀足袋とは、一般的な足袋と違い、写真 2 のように足袋底に石底という当て布が 4 か所に縫い付けられている特殊な形をした白足袋であり、三熊野神社大祭で祭りに参加し祢里を曳く人びとが全員そろえて履くものである。

横須賀足袋の形は昭和初期に運動足袋として普及し、やがて祭り足袋として四国の阿波

踊りなどでも使われるようになった。三熊野神社大祭では以前から足袋裸足で祢里を曳いていたため、この足袋と相性が良く横須賀でも定着していった。しかし、この形式の足袋は15の工程を経て作られ、特徴的な足袋底一つ作るにも時間がかかるため他の足袋に比べて手間がかかる。それによりこの形の足袋は時代の流れの中で各地から少しずつ姿を消していった。衰退の流れの中で石底のある足袋の形がそのまま残り、現在でも使われ続けている数少ない地域が横須賀なのである。

横須賀足袋は主に横須賀街道沿いの足袋の店「わたや」で「遠州横須賀祭り足袋」という名前で販売されている。店主の竹内誠人氏（男性、60代）によると、友人から足袋の卸先として紹介された磐田市の祭り用品店の人と話している際に、先述のような流れを経てきたこの足袋のことを「遠州横須賀祭り足袋だね」と言われたことで「遠州横須賀祭り足袋」と名付けるようになったという。

同じ形をした足袋が残っている地域は少ないが、形は全国的であり横須賀発祥でもないということから「遠州横須賀祭り足袋」という商標登録は残念ながらできなかった。その代わりとして、竹内氏が販売する足袋には底に赤い判子が押されている。判子が押されるようになったのは、足袋の作成を業者に依頼するようになったからである。以前は足袋すべて竹内氏自らがミシン縫いで作っていた。しかし、作るのに手間がかかることと竹内氏自身の年齢に加えて材料の調達が困難になりつつあることも重なり、今は形や縫い方等を指定し業者に一括で作成を依頼している。これにより竹内氏が足袋を作るうえで手を加えることはなくなったが、完成した足袋は竹内氏の下で検品され、赤い判子を押されることで初めて「遠州横須賀祭り足袋」となるのである。外向けとしては「遠州横須賀祭り足袋」の名前が使われるが、横須賀の人や竹内氏はこの足袋のことを「足袋」または「横須賀足袋」と呼んでいたため、本報告書では「遠州横須賀祭り足袋」のことを「横須賀足袋」と表現する。

では、横須賀足袋と三熊野神社大祭はどのような関係にあるのだろうか。



写真2 横須賀足袋の足袋底（岡田撮影）

2.2 祭り装束の中の横須賀足袋

まず、足袋も含めて三熊野神社大祭で着用する祭り装束について説明しよう。現在三熊野神社大祭で祢里を曳く人びとが身につけている祭り装束は藍染の法被、腹掛け、股引、加えて肉襦袢と三尺、手ぬぐい、横須賀足袋である。横須賀の装束は江戸の町火消しの装束が元になっている。総代事務局を務める萩原由巳氏（男性、60代）によれば、江戸の町火消しは、鐘が鳴った瞬間にすぐに出ていけるように足袋底を石打ちで補強した白足袋裸足であり、荒縄で法被の裾を処理して火事場へ行っていたという。その町火消しの所作を元にした祭り装束だからこそ白足袋なのである。

各町祭り装束において形や藍染であることは同じだが、法被や肉襦袢、手ぬぐいは色や柄など13町異なるものを着ている。その中で13町共通なのが足元の白足袋であり、足袋の店「わたや」に皆買いに行く。Y氏（女性）によると、祭りの準備が進む中、祭り直前に足袋を買いに行くことで祭りや春の訪れを感じ、新品の足袋を買うことが気持ちを新たなものにしてくれるという。これまで他の足袋を履こうと思ったこともなく、それくらいに横須賀足袋へのこだわりは持っているとも語っていた。

2.3 代わりのない横須賀足袋

上述の通り、横須賀足袋は横須賀の祭り装束の中で欠かすことのできないものである。また、竹内氏をはじめ今回話を聞いた祭り参加者の多くが、足袋はこの横須賀足袋でなければならないと語っていたことからわかるように、祭りにおいて横須賀足袋が重要だということは13町全体の共通認識でもある。横須賀の人びとにとって横須賀足袋は当たり前前の存在であるが、色や形、足袋の長さなど様々な点においてこの横須賀足袋でなければならない、というこだわりがある存在なのである。

三熊野神社大祭は、神事が一番正しく行われていたといわれる時代、戦後荒れてしまった時代、そこからの復興まで時の流れの中で変化してきた。また、20年以上前の祭り装束は現在の藍染と違い絹で作られた黒の羽二重であったように、祭り装束も変化してきた。そのような時の流れに沿って変化してきたものがある中で、足元の足袋は白であり今という横須賀足袋であることは変わらず、履き続けられている。

一方で、横須賀足袋もある面では変化してきた。それは、生産の面である。先述したように、現在は業者に足袋の作成を依頼し、竹内氏が押印した後、その足袋を横須賀足袋として販売している。そのため、「横須賀足袋のこだわりのある部分を残しつつ業者が依頼を受け入れてくれるような注文にしなければならず、わがままを言えないと感じる部分がある」と竹内氏はいう。そのような状況の中、現在も残っているこだわりは足袋底の指の付け根の二重ミシンである。二重ミシンになっていないだけで足が疲れやすく痛くなるため、どうしても、と業者に竹内氏が依頼したのだという。これは横須賀足袋を実際に履き、自身も祭りに参加している竹内氏が作るからこそわかることである。一方で、変わってしま

ったのは足袋のこはぜが 3 枚から 4 枚になったことである。こはぜとは、足袋を履いた後、足首の後ろを止めるための爪型の金具のことである。本来ならば 3 枚の短さが理想であるが、「それではできない」と業者にいわれてしまったのである。このような変化を受け入れなければならない中でも、横須賀には欠かせないものとして、横須賀足袋を残そうとする竹内氏の努力により横須賀足袋は残り続けており、他に代わりの足袋などないのである。

3 西大渚の黒足袋

これまでは白い横須賀足袋について述べてきた。この節では西大渚での神事の際に着用される黒足袋を取り上げる。

3.1 西大渚とは

三熊野神社大祭では 13 の字町に基づいて 13 台の祢里が曳き廻される。そのうちの一つが西大渚である。西大渚は三熊野神社の御神体があったところとされ、宮本の町かつ祭りの神事を司っていたのが西大渚の氏子であった。加えて、祭り組織のうち各町の代表である総代は西大渚では 2 名選出される。本来総代は各町 1 人であり、2 名選出されるのは西大渚と河原町だけである。河原町については町の広さと喧嘩が絶えなかったことが理由であるが、西大渚は町の広さに加えて、祭りの神事において重要な位置を占める町だからである。

祭りの最中、神事に忙しい町であるため、以前は西大渚の町民は祢里の曳き廻しには参加していなかった。しかし、各町の祢里の曳き廻しを見ることで、「祢里を曳きたい」という声が町民から上がるようになった。しばらくして西大渚からも祢里を出し、曳き廻しに参加することとなった。

ここまでは西大渚がどのような地域であるのかについてみてきた。次は、西大渚でどのようなときに黒足袋が用いられるのかについて述べる。

3.2 お祓いの際の黒足袋

三熊野神社大祭では最終日に地固め舞という神事が行われる。これは大地を祓い清め、五穀豊穡を祈るものである。地固め舞には 7 つの舞があり、それぞれの舞に合わせて太刀や長刀などの道具が用いられる。そして、この地固め舞を奉納するのは厳しい練習を重ねた西大渚地区の青年が担うのが決まりである。

地固め舞奉納の前日午後 4 時ごろ、地固め衆は三熊野神社の拝殿の左側にある祓所に集まる。石段に地固め舞で使う道具や衣装の入った風呂敷を置き、祓所の中に並び宮司によるお祓いを受ける。このあと、お祓いを受けた地固め衆は宮司と共に社務所に入る。そして、地固め衆は翌日の奉納本番まで宮籠りをする。これが一連のしきたりとされているが現在ではお祓いを受けたのち社務所に入るところまでであり、宮籠りはしていない。

前述のとおり、三熊野神社大祭で用いられる足袋は白い横須賀足袋である。一方で、地固め衆が受けるお祓いの際はお祓い用の装束に身を包み、必ず黒足袋を履かなければならない。西大淵の青年の幹事かつ、2016（平成 28）年の大祭の幹事長を務めた降旗武氏（男性、20 代）によると、「お祓いを受けるときだけ黒足袋を履く」のだという。しかし、横須賀足袋のようにこの黒足袋に形など指定や規定はなく、黒であればいいということであった。降旗氏によると、地固め舞を奉納するときは横須賀足袋にわらじを履いて舞うため、黒足袋が登場するのは地固め衆がお祓いを受けている時だけだという。また、黒足袋でなければならない理由はわからないが、祭り用の白足袋とお祓い用の黒足袋で分けることで、神事のために準備し切り替えているということをはっきり示すためではないかとも降旗氏は語っていた。お祓いを受ける際に新品の横須賀足袋を用意していたとしても、白では衾里を曳くときに履いていたものとあまり区別がつかない。しかし黒足袋を履くことでお祓いのため、神事のために新しいものを用意しているということが目に見えてわかるからではないかということであった。降旗氏は加えて、お祓いを受けている時間帯に 13 台の衾里の曳き廻しが行われているため、西大淵以外の 12 町の多くの町民はこの時に黒足袋を履いていること、あるいはお祓いを受けていることすら知らないだろうと語っていた。横須賀のほとんどの人が知っている白い横須賀足袋と対照的に、認知度が低いながらも神事を支えているのが西大淵の黒足袋なのである。

4 おわりに

ここまで、皆が履く白い横須賀足袋と、西大淵の地固め衆がお祓いを受ける際に履く黒足袋について述べてきた。最後にそれら 2 つの足袋が横須賀においてそれぞれ何を表しているのかを私の観察からとらえたものを述べよう。

4.1 粋の横須賀足袋

祭りに関わる人たちから話を聞いている中で、何回か「粋」という言葉を耳にした。「横須賀の粋なところはどんなところだと思うか」という質問に対し、降旗氏や鈴木武史氏（男性、50 代）は「何かやりにくいことや見返りのないこと、不条理なことであったとしても、その先にあるもののためにやっているところ」だという。祭りに関わる中でもただ祭りが好きだからという理由だけでやるには困難なことが多い。けれど、それを乗り越えた先に生まれる関係性や、祭りを無事開催できたということが横須賀の人びとにとっては価値あるものなのである。それを横須賀の人はやりのけてしまえるのが「粋」なのである。

それは横須賀足袋においても同様である。竹内氏の前職は足袋職人と全く関係のない仕事をしており、現在は足袋の店である「わたや」も以前は布団屋であった。そんな竹内氏が足袋職人になったのは、それまで足袋づくりを先代から引き継いだ人が引退することになり足袋を作る人がいなくなったこと、竹内氏も前職を辞め、新たな職を探していたこと

が重なったのがきっかけである。当時、竹内氏は遠州横須賀倶楽部など横須賀のための活動に関わっていたこともあり、横須賀ならではのものに関わる仕事がしたいと考えていたことからミシンを譲り受け、一から足袋づくりを学んで足袋職人となったのである。たとえ横須賀ならではのものに関わりたいたいという思いがあったとしても、一から学ばなければならぬ足袋職人になるというのはとても勇気のいる決断である。横須賀足袋は本来竹内氏が作っていたものでもなければ、竹内氏がやらなければならないものでもない。しかし、誰かが足袋づくりを引き継がなければ横須賀の皆が必要とする足袋がなくなってしまう、祭りができなくなってしまう可能性もある。そんな横須賀のために苦労をやってのける竹内氏はまさに横須賀ならではの粋な人であり、祭りへの強い思いが感じられる。また、足袋の値段がどうしても高くなっている今でも、足袋を守るために買い続けている横須賀の人びとの心意気や行動も粋であるといえる。竹内氏の思いと、横須賀の祭り好きの人びとの思いを背負うのが横須賀足袋であり、祭りで皆に履かれている横須賀足袋はまさに「横須賀の粋」を体現するものである。

4.2 象徴の黒足袋

横須賀足袋について調査していた際、黒足袋の存在を降旗氏から聞いたとき、私は衝撃を受けた。三熊野神社大祭に訪れたときに見たのは白足袋だけであり、一週間横須賀に滞在していた中でも黒足袋を見かけることはなく、白足袋以外の足袋が横須賀にあるかという疑問さえ考えることはしなかった。降旗氏の言うように、おそらく西大瀬以外の12町の多くの人が私と同様であろう。そんな黒足袋の存在は、「横須賀の人びとにとって足袋と言えば横須賀足袋である」という共通の意識が横須賀の人びとの中に強く根付いている事態を反映するものであろう。

では、なぜ地固め衆は必ず黒い足袋を履くのだろうか。降旗氏の言うように祢里の曳き廻しと神事の区別をはっきりさせるということも理由のひとつかもしれない。しかし、私は白と黒で神聖な神の世界と穢れている人間界とを表していると考えます。お祓いを受ける前の地固め衆は人間界に属す穢れた存在のため黒を履き、お祓いを受け清められた身体で神に近いとされる白の足袋や装束を身につけて神事の地固め舞を奉納する役目を果たすのである。竹内氏によると、各町の総代は最終日の神輿渡御の行列に玉ぐしをもってお供しながら町内を回り、お宮に戻ってくると西のお堂から回って東のお堂に出た時に玉ぐしを刺して帰ることで役目を終えるのだという。玉ぐしを持っている時はより神に近い存在となり、玉ぐしを手放すことで人間界に戻るということになるという考えから、黒足袋の話と似ているという。これらのことから黒は人間界の穢れていることを示し、白は神に近い清いことをそれぞれ象徴しているのではないかと感じる。

冒頭で引用した青木の、イギリス女王の戴冠式に関する分析の中で、足袋に対する私の見解に似た記述を見つけることができる。戴冠式では女王が身につける衣の変化で神聖さの変化を表している。女王がそれまで着ていた聖衣を脱ぐことでか弱い存在となり、その

か弱き身で聖なる大主教から聖別を受ける。それによって彼女自身とその地位は神聖化され、王衣を身につけ一人の女性から美德の器へと変わり、社会へ徳を注ぐべき存在になるのだという（青木 2006）。戴冠式の場合は衣の変化で一般の女性から女王という神聖な存在への変化を象徴していた。横須賀ではそれが足袋の色の違いで象徴されているのである。

また、日本と韓国の色彩感覚の比較をした白淑子と鈴木信康によれば、色を使う歴史は古く各国の民族性文化と共に独自の表現を持っている。日本では白は清浄無垢、潔白を表し神事の神聖な色として神代の最高色に位置されてきた。一方韓国では白に対する色観は自然と同化の概念があり、衣服や食事など生活様式の中に白への愛着が見られるという（白・鈴木 1999）。それに加えて、日韓の白と黒という言葉や色の使い方から白と黒の色彩観の現れや社会の在り方について述べている金泰虎によると、前近代までは万物は木、火、土、金、水の 5 元素からなり、それに色も対応しているという五行説の考え方から白と黒は互いを補強する元素とされ、対立するものではなかった。後に西洋の白と黒を対比させる色彩観が入り込んできたことで日本においても白と黒に対して対立の色彩観がもたれるようになったのだという（金 2015）。私たちは潜在的に白を神聖視しており、それに相対するものとして黒を用いるという色彩観を持っているということが、降旗氏や竹内氏のような解釈が生まれ、上述のような解釈ができることの要因の一つである。

では、黒でなければならない理由がわからない今でも黒足袋が履かれ続けている理由は一体何なのだろうか。イギリス女王の戴冠式は近代になっても数万の国民が参加し祝福するが、戴冠式が行われることで女王は神格化され、法の下で国民を守護する義務を誓い国民がそれに対して忠誠を誓うという儀礼の正しい意味や意義を知る者、知ろうとする者はほとんどいない。それでも国民が戴冠式に熱狂するのは、女王という存在が世俗権力という政府が立ち入ることのできない聖性を帯びた権威を持ち、イギリス社会において中心性を持っているからであるという（青木 2006）。横須賀において中心を占める出来事はおそらく三熊野神社大祭である。三熊野神社大祭を中心に日々過ごす横須賀の人びとにとっては古くから伝わる伝統を崩してしまってはならないという思いがあり、そのためにお祓いを受けるときは黒足袋を履き、祢里を曳くときは必ず白の横須賀足袋を履くのである。儀礼の正しい意味や意義を知らずとも人びとがそれを実践するのは、大国のイギリスであっても、小さな地域である横須賀においても同じなのである。

この解釈から、横須賀足袋が白でなければならない、祢里を曳くときには横須賀足袋でなければならないことが、祭りにおいて神聖な神事を行っているからこそだという理解にもつながるといえる。そして、横須賀の多くの人々が知らない黒足袋の存在こそが、横須賀の人びとの間で確立し、ほかに代わりのない存在となった横須賀足袋のもつ象徴的重要性とともに、それが体現する「横須賀の粋」を照らし出しているのである。

参考文献

青木保

2006 『儀礼の象徴性』 岩波書店。

掛川観光協会

2016 「掛川観光情報 掛川で遊ぶ・お買い物 わたや」 掛川観光協会ホームページ
(2016年10月30日取得、
http://www.kakegawa-kankou.com/kanko/guide/facility_detail.php?_mfi=192)。

金泰虎

2015 「白と黒の色彩から見る日韓文化と社会：言語と観念の色を中心に」 (2016 年 10 月 24 日取得、
https://konan-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1528&item_no=1&page_id=40&block_id=38https://)。

白淑子・鈴木信康

1999 「日本・韓国の色彩に関する比較研究 衣をめぐる伝統色と若者達の官能調査から」 (2016 年 10 月 24 日取得、
http://ci.nii.ac.jp/els/110000055057.pdf?id=ART0000394217&type=pdf&lang=en&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1477276857&cp=))。